

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成30年 11月 26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 医学研究科

職 名・学 年 博士後期課程1年

氏 名 松本 瞳

助成の種類	平成 30年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	28th Alzheimer Europe Conference	
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発表題目	An Evaluation of the Dementia Early Identification and Care Service Characterization of users and needs to support	
開催場所	Barcelo Sants Plaza Paisos Catalans, s/n, Sants-Montjuïc, 08014 Barcelona, Spain	
渡航期間	平成 30年 10月 28日 ~ 平成 30年 11月 1日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円
	使用した助成金額	300,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	旅費：170,000円
		学会参加費：40,000円
宿泊費・滞在費：90,000円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貫財団から経済的な後押しを頂けたことで、研究成果の公表に向け集中して準備と発表に臨むことができました。自信のある研究成果を得つつも経済的な理由で国際学会参加を諦めざるを得なかった学生にとってはまたとないチャンスだと思います。 貫財団の助成は申請プロセスも明瞭であり、業績欄を申請書に設けていなかった点も発表する研究成果を公平に審査して頂いている印象を受けました。助成額もヨーロッパ圏への渡航には丁度良いかと思えます。	

成果の概要

医学研究科 博士後期課程

1 年生松本 瞳

1. 研究集会名

28th Alzheimer Europe Conference

2. 発表題目

An Evaluation of the Dementia Early Identification and Care Service
-Characterization of users and needs to support-

3. 学会の概要と総評

本学会は、アルツハイマー型認知症を筆頭に、認知症や認知機能障害に関わる医療・福祉領域の研究者、臨床家、認知症の当事者やその家族らが集い、認知症に対するより良い治療やケアについて討論することを目的としている。学会内で取り上げるテーマは認知症のメカニズムの解明、治療、政策、ケアや看取りまで多岐にわたる。28 回目となる今回はヨーロッパ圏を中心に 150 カ国から 800 人以上が集い、ポスター発表、ポスターオーラル発表、口頭発表を通じて積極的な討論を行った。また、アルツハイマー型認知症をもつご本人やご家族がご自身の体験を伝えるブースも設けるなど、当事者の体験や思いを尊重しながら議論を深めようという趣向がみられた。口頭発表では認知症分野の最新のトピックが扱われ、またヨーロッパ圏内での学術的協働に関する情報も随所で盛り込まれていたことが印象的であった。

本学会では『認知症のケア』の先進地域といわれているヨーロッパ圏らしく、発表者のテーマにもその意識が反映されていた様感じた。注目を集めていた発表テーマとしては、認知症をもつ人々が集い、お茶や創作活動を楽しむことを目的とした“Alzheimer Art & Cafe”や、従来の高齢者療養施設とは一線を画す、認知症を持つ人の特性を考慮して設立された大型療養施設“Dementia Village”，認知症をもつ人が日々大切にしていることや周囲への思い、終末期の過ごし方などについて、前もって意思を記録しておく手帳型ツール“Rosemary Diary”など、疾患の根治を模索するだけでなく、認知症をもつ人々を支える新しい試みやツールが注目を集めていた。一方で、認知症治療やメカニズム解明の推進に関する報告は比較的少ない印象であり、これには地域差や学会の特性が反映されているものと思われた。

4. 参加の成果

今回、ポスター発表として“An Evaluation of the Dementia Early Identification and Care Service”と題し、認知症の早期発見と早期支援の導入を目的とした地域密着型の新しい支援システムについて発表を行った。認知症の早期発見・早期介入は今回の学会テーマの一つ

でもあり、多数の方にブースに来て頂けたように思う。発表内容が行政と認知症専門家とのコラボレーション型の支援システムであったためか、将来的に類似した支援システムを立ち上げる予定だというイタリアの行政関係者がわざわざ私のブースを探し、話しかけて下さったことが印象深い出来事であった。

彼女とは支援システムを構築する上で留意すべき点についてディスカッションを行い、またイタリアの認知症医療・福祉にまつわる現状を聞くことができた。これは日本でも課題の1つとしてあげられるが、支援システムを立ち上げた後にどのような経済的基盤のもとで運営していくかが現在の検討事項になっているということであった。

イタリアと日本では医療保険制度が異なるため、一概に同じような政策をとることはできないが、支援システムがどの程度認知症の診断率を向上させ、新たな支援サービスへ移行できるのかを定量的に示せたことは評価して頂けたようだった。「まだまだ聞きたいことがあるわ。今後も連絡し合いましょう。イタリアに来たらぜひ連絡してね。」とにこやかな笑顔で今後もメールを介してやりとりを続けることを約束し別れたが、わざわざ私のブースに足を運んで下さったこと、熱心に発表内容に関して耳を傾けて下さったことに胸が熱くなった。日本からの参加者は私のみであり、心細い気持ちは会期中も心の隅に絶えず残っていたが、日本国内の認知症支援をアピールすることに微力ながら貢献できたのではと思う。

また、渡航前に熟読していた論文の著者と直接会話できたことも非常に有意義な出来事の一つであった。彼女の地域在住認知症高齢者に対するリハビリテーション介入の効果検証は、認知症の在宅支援を検討するにあたり重要な知見であるが、当の本人は「せっかく多くのお金と時間をかけて検証したのに、狙い通りの結果が出なくて泣きたくなったのよ。」と研究を行う中での苦労を笑い話として語っておられた。今まではこちらが一方的に知っている『有名な研究者』であった彼女の存在が、一気に自分の近しい世界のものとなり、また直接会話や冗談を交わすという経験は学会参加の醍醐味であろう。

最後に、今回多くの参加者とお話しする機会があったが、緊張してしまい説明したいことが上手く言葉にならないなど、歯がゆく反省点も多かった。ただし、それ以上に自分の研究成果がきっかけとなり憧れの研究者や、思いもよらなかった業種の方と知り合えたことは今後の成長にとって大きな意味があることは間違いない。私の研究成果について多くの方に興味をもって頂けたことは自信にもつながり、ディスカッションを通じて新たな研究アイデアも創出することができた。何より、日々の臨床や研究活動に情熱を燃やしている参加者と交流できたことは大いに刺激となった。

学会最終日の翌日、早朝のバルセロナの空を眺めながら、今回の経験を糧により一層研究生活を充実させ、また国際学会の場に戻ってきたいと決意も新たに帰路についた。

このような機会を頂いた京都大学教育研究振興財団の皆様には厚く御礼申し上げます。貴財団の助成なくしては、今回の充実した経験は得られませんでした。